

■名古屋外国語大学現代国際学部 紀要 第13号 2017年3月

論文

英語の Tough 構文について

On the English “Tough Construction”

山本幸一

Koichi Yamamoto

1. はじめに

Tough 構文とメトニミーについての学生の反応、それを受けての授業での説明。この2点を線で結んだ、Langacker (1995) による Tough 構文のメトニミーとしての分析、及び問題点の指摘、そして、本論の Tough 構文とメトニミーについての提案。以上が本論の概要である。⁽¹⁾

2. Tough 構文と授業での説明

筆者が担当しているライティングの授業では、エッセイを課題として課しているが、学生のエッセイの中に、次のような Tough 構文の理解不足から生じる間違いが見られた。

- (1) (a) I think we are easy to communicate fearlessly.
- (2) (a) People are a little easier to get a job.
- (3) (a) I think it makes them easy to learn it.
- (4) (a) A school child is easier to enjoy studying English than older people.

本来は、次のように表すべき内容であろう。

- (1) (b) I think it is easy for us to communicate fearlessly.
- (2) (b) It is a little easier to get a job.
- (3) (b) I think that makes it easy for them to learn it.
- (4) (b) A school child can (is apt to) enjoy studying English more than older people.

述語形容詞として、“easy”、“tough”のような「難易度」や、“comfortable”、“pleasant”のような「快・不快」の意味を表す形容詞が用いられ、[名詞句][be 動詞][形容詞][不定詞]という形式をもつ構文は、この構文の代表的形容詞“tough”にちなんで、「Tough 構文 (“Tough” construction)」と従来呼ばれている。学生に、(5) の文 (Tough 構文としては間違い) が正しいか、間違っていると思うか、という質問を試してみた。すると、正しい、という回答が56人中27人いた。

- (5) He is easy to catch a cold.

以上の状況から、以下のような Tough 構文の成り立ちの説明を行った。Tough 構文に用いられる形容詞は、元来、(6) のように、主語位置に行為を取るのが自然である。

- (6) “To read this book” is easy. (It is easy “to read this book”.)

そして、形容詞の表す性質を認識者が感じる過程において、動作の対象に原因がある場合に、「対象を主語に立てる」ことが可能になり、また、「どのような動作で判断がなされるか、動作の情報を追加する」ことが行われ、(7) のような Tough 構文が成立すると考えられる。

(7) “This book” is easy to read.

また、なぜ、不定詞は受け身でないのかという点については、「認識者＝行為者」と捉えられるためである。学生の反応と理解は上々であった。

3. メトニミー

「ことばのしくみ」の授業で使用したテキスト『野村（2014）』の第5章では、メトニミーを扱っている。次のメトニミーの例文が挙げられているが、筆者は扱い難く感じた。なぜなら、メトニミーのプロトタイプではない例が多く取り上げられていると考えるからである。

- (8) buy (wash, vacuum-clean, fill up, service, lock) a car
- (9) Little Red Riding Hood
- (10) フグの雑炊！うまいよっ。一同、顔を寄せ合って土鍋の匂いをかぐ。
- (11) The kettle is boiling.
- (12) My pencil broke.
- (13) The phone rang.
- (14) My computer just crashed.
- (15) We need some new faces around here.
- (16) There wasn't a sail in sight.

また、メトニミーの定義は「隣接関係による比喩」としてある。定義も、例文も、学生に説明する上で分かり易いものではなく、メトニミーについては、一工夫が必要であると感じ、筆者独自の説明を行った。

4. メトニミーと授業での説明

まず、「隣接関係」が分かり難いので、メトニミーの定義としては、初山（2010）を参考にして「外界の2つの事物間、あるいは2つの概念間に「関連

性」が捉えられる場合、一方の事物・概念を通して、他方の事物・概念を捉える認知能力」と示した。物理的に接触していたり、隣接している、というだけでなく、(17) のような例もメトニミーであるのだから、「関連性」という概念によって括るのが妥当である。

(17) 海王星がやって来た。 (「海王星を研究している学者」を指して)

次に (18)(19) のメトニミーを見てみよう。

(18) 赤頭巾がやって来た。

(19) 風車が回っている。

代名詞の照応を見てみると、次のような違いがある。

(20) 「赤頭巾」がやってきた。

*それは、お母さんが作ってくれた赤頭巾だ。

それは、大きな瞳をした女の子だ。

(21) 「風車」が回っている。

それは大きな風車だ。

*それは大きな羽根だ。

以上の言語事実から、メトニミーを2種類に区分することが理にかなっており、それぞれは次のように図示できる。図の太字部分が、言語表現が指し示している対象である。

「赤頭巾型」メトニミー

指示対象が変化： 赤頭巾 → 女の子

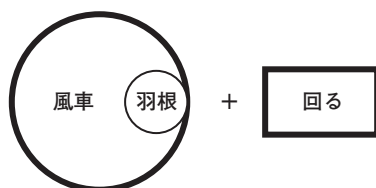


「風車型」メトニミー

述語との直接のアクセス・ポイントが浮き出る：

風車 → 羽根

指示対象は変化していない



それぞれの例を更に見てみよう。

赤頭巾型メトニミー

変化した指示対象

13号室がエアコンが効かないと言っている。

13号室の客

赤シャツが嫌みを言っていた。

赤シャツを着た男

Little Red Riding Hood

赤頭巾を被った女の子

雪虫（この虫が漂うと、初雪が近いという説から）

初雪が近いと言われる虫

We need some new faces around here.

新しい顔の社員（新入社員）

There wasn't a sail in sight.

帆を持つ船

風車型メトニミー	アクセス・ポイント
頭を刈る	髪の毛
トイレを流す	水
buy (wash, vacuum-clean, fill up, service, lock) a car	自動車のいろいろな部分
一同、顔を寄せ合って土鍋の匂いをかぐ	料理
The kettle is boiling.	水（湯）
My pencil broke.	芯
The phone rang.	鳴る部分（装置）
My computer just crashed.	機械の部分

5. Tough 構文とメトニミー

4節まで、Tough 構文とメトニミーをそれぞれ扱ってきた。この両者の接点は Langacker (1995) である。Tough 構文をメトニミーの一種「PF-AZ の不一致」及び「参照点構造」として分析している。そこで、まず、「PF-AZ の不一致」及び「参照点構造」について見てみよう。

5-1 アクティブ・ゾーンとプロファイルの不一致

Langacker (1995) は「メトニミーの特別なケース」として「アクティブ・ゾーンとプロファイルの不一致 (Active-Zone Profile Discrepancy)」(以降、「PF-AZ の不一致」とする。)について、次の説明をしている。

[...] a special case of the metonymy that virtually all relational expressions exhibit in regard to their choice of overtly coded arguments. Langacker (1995)

この「メトニミーの特別なケース」である「PF-AZ の不一致」は、事実上すべての「関係 (relation)」が、「主語」、「目的語」という「項 (argument)」の選択に関して示すものであるとされている。「PF」とは、言語使用者が注

目する際立ちの大きい部分で、言語表現が直接指し示す部分である。「AZ」とは、言語表現に表されている「関係 (relation)」に直接関わる部分である。「PF-AZ の不一致」を具体例で見てみよう。

(22) David blinked.

(23) She heard the piano.

(22) (23) Langacker (1990)

(22) (23) において主語の “David”、目的語の “piano” が指し示している対象は、それぞれ、人間の “David”、楽器の “piano” である。しかし、これらは、「関係」である “blinked”、“heard” と直接関わる対象ではない。直接関わる部分である AZ は、“David”、“piano” にそれぞれ関連した “eyelids”、“sound” である。Langacker は、「PF-AZ の不一致」が存在するのは、言語表現にとって自然なことであり、むしろ、PF-AZ が一致することの方が稀であるとしている。

5-2 参照点能力

従来のメトニミーの定義において使われてきた「隣接性」について、Langacker (1993) は、参照点能力に還元できるとして説明している。Langacker によれば、ある対象を認知する場合、それを直接把握することが常に可能とは限らず、別の事物の概念を想起して、それを手がかりにしてその対象との心的接触を果たしている。その認知能力を「参照点能力 (Reference-Point ability)」と呼び、その手がかりを「参照点 (Reference Point)」、認知対象を「ターゲット (Target)」と呼んでいる。所有構文も参照点能力の表れである。

5-3 Langacker (1995) の Tough 構文の分析

Langacker (1995) は、Tough 構文をメトニミーの一種としての「PF-AZ の不一致」及び「参照点構造」として分析している。

(24) (a) To like Don is easy.

(b) Don is easy to like.

(24) Langacker (1995)

文主語構文 (24) (a) で使われている “easy” を EASY 1、Tough 構文 (24) (b) の “easy” を EASY 2 とすると、(24) (a) と (24) (b) の構文の意味が異なるのと共に、両構文の述語の意味についても異なると考えている。EASY 1 の意味を基本的意味 (prototype) とし、EASY 2 の意味を拡張した意味 (extension) として、両者の違いを次のように考えている。

EASY 1 「プロセス」をトラジェクターとして選択する。

EASY 2 「モノ (参与者)」をトラジェクターとして選択する。

EASY 1 と EASY 2 は同じベースをもっているが、プロファイル (profile) の仕方に違いがある。(24) (a) では、不定詞の表すプロセスと述語形容詞との関係をプロファイルするが、(24) (b) では、不定詞の表すプロセスに関するモノ (参与者) と述語形容詞との関係をプロファイルしている。(24) (a) では、トラジェクターに関して PF と AZ が一致しているが、(24) (b) では、トラジェクターに関して PF と AZ が不一致となっている。以上をまとめると次表のようになる。

EASY 1	トラジェクターは名詞化されたプロセス (nominalized process) によってプロファイルされる。
EASY 2	トラジェクターはプロセスと関係する参与者 (processual participant) によってプロファイルされ、次のように「PF と AZ の不一致」が起きている。
Don (モノである参与者) PF	→ To please Don (名詞化されたプロセス) AZ

以上の Langacker (1995) のメトニミーによる分析によって、Tough 構文について説明が必要とされる2つの問題点について、どのような説明がなされているのか、次にまとめてみよう。

- A. Tough 構文の述語形容詞は、行為について叙述する意味を持っている。
しかし、Tough 構文の主語は名詞句で示されるモノである。この意味の不整合をどのように説明するか。

主語位置の名詞句は、「PF としてのモノ」であるものの、述語形容詞と直接結びついているのは、不定詞の表す「AZ としてのプロセス」であるので、不整合は解消できる。

- B. Tough 構文の主語位置の名詞句は、文の主語でありながら、不定詞の目的語としての意味も兼ねている。この意味の2重性をどのように説明するか。

述語形容詞が多義性を持ち、拡張された繰り上げ述語の意味は、トラジェクターのプロファイルにおいて「PF-AZ の不一致」というメトニミー構造を内包するものである。そして、主語位置の名詞句は、「PF としてのモノ」であるのと共に、不定詞の表す「AZ としてのプロセス」のランドマークも兼ねている。

以上のように、Langacker (1995) のメトニミーによる分析は、「名詞句と述語との意味の不整合」及び、「主節の名詞句の意味の2重性」の2点について説明ができる。

6. Langacker (1995) の問題点

5節で見た Langacker (1995) の問題点を2点挙げる。

A. メトニミーの下位区分の明確な説明に欠ける。

(25) (以降、下線は筆者) の一般的なメトニミーでは、指示対象が変化 (被り物→女の子) しているが、メトニミーの一種とされる PF-AZ 不一致 (26) では、指示対象が変化 (人→まぶた) しているわけではない。

(25) Little Red Riding Hood came.

(26) (=22) David blinked.

B. AZ-PF 不一致の下位区分の明確な説明に欠ける。

(26) の典型的な PF-AZ 不一致では、PF である主語の指示対象 (人) の一部分が AZ (まぶた) であるが、Tough 構文 (27) では、指示対象 (ジョン) の一部分が AZ (喜ばせる行為) というわけではない。

(27) John is easy to please.

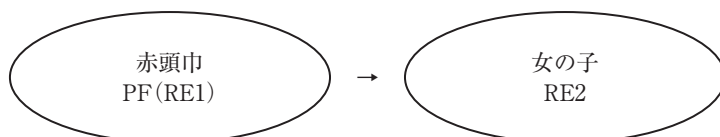
7. メトニミーの下位区分

Langacker は、「メトニミーの特別なケース」として「PF/AZ 不一致」の分析を提示している。これは、メトニミーの中には、PF/AZ 不一致現象と関わらないメトニミーもあることになる。しかし、これまで、PF/AZ 不一致の見地から、メトニミーの下位分類を行っている先行研究は管見の限り見つからない。その理由としては、Langacker (1984) (1995) で、PF/AZ 不一致が、メトニミーを説明する概念として取り上げられたものの、辻 (2002) の次の記述のように、Langacker (1993) で「参照点構造」が、メトニミーを説明するより包括的な概念として取り上げられたため、PF/AZ 不一致に注目がなされなくなったことが考えられる。

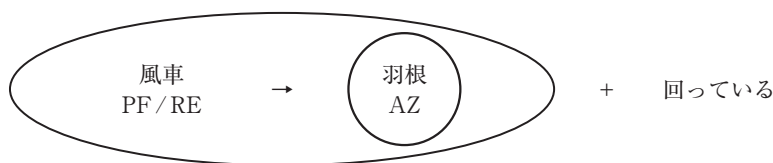
換喩は認知文法において当初、「活性化領域とプロファイルの乖離」を含む現象として分析されたが (Langacker 1984)、その後、参照点構造という認知的基盤を持つと一般化されるようになった (Langacker 1993)。

本論では、4節で見た、学生への説明のように、メトニミーを2タイプに下位区分するが、7節・8節では、それぞれのタイプの性質を更に明確にしたい。4節で区分した「赤頭巾型」、「風車型」をそれぞれ、Profile / Referent 不一致メトニミー、そして、Profile / Active-Zone 不一致メトニミーと新たに呼ぶことにする。尚、RE は、指示対象 (referent) を示すことにする。両メトニミーは次のように図示される。

Profile / Referent 不一致メトニミー (RE の変化)



Profile / Active-Zone 不一致メトニミー (RE は変化しなく、動詞との直接関与対象 AZ が生起)



8. PF-RE 不一致と、PF-AZ 不一致の2タイプのメトニミー

7節では、メトニミーが、PF-RE 不一致と、PF-AZ 不一致の2タイプに下位区分されると主張した。本論では、前者のメトニミーのメカニズムを「特徴づけ」、後者のメカニズムを「意味の2層構造」と捉える。この各メカニズムと下位区分の妥当性について見てみよう。まず、「特徴づけ」とは、ある指示

対象を、どのように特徴づけるか、つまり概念化して指し示すのか、という問題である。言い換えれば、「対象を、他と識別できる際立った要素で代替する」ということである。(28)における Little Riding Hood の指示対象が女の子であるとすれば、(29)におけるように、いろいろな特徴づけが可能である。

(28) (= 25) Little Red Riding Hood came.

(29) Little Red Riding Hood, Jane, Mary's sister, our neighbor's second daughter

ただし、「一方の事物・概念を通して、他方の事物・概念を捉える」メトニミーの定義を満たすのは Little Red Riding Hood のみである。

他方、「意味の2層構造」とは、言語表現の指し示す対象と、述語が直接関係する対象との乖離現象である。(30)の乖離、つまり2層構造は下のよう示される。

(30) (= 22) David blinked.

表面の意味：言語表現の伝達内容は、観察対象 PF「デイヴィッド」についての叙述。

背後の意味：述語“blink”が直接関係するのは、観察対象「デイヴィッド」の一部分の AZ「まぶた」。

9. PF-RE 不一致と、PF-AZ 不一致の2タイプのメトニミーを支持する言語現象

本論の提案する、2タイプのメトニミーの存在を支持する言語現象を4点見てみよう。

9-1 重なったメトニミーの説明

(31) (32) を見てみよう。(31) は PF-AZ 不一致のメトニミーであるが、(32) は、PF-RE 不一致と PF-AZ 不一致の両タイプのメトニミーが重なって機能している例であり、本論の考え方では A のように分析できる。メトニミーが PF-AZ 不一致タイプのみであれば、B のように分析され、不都合が生じる。なぜなら、(32) の文に、red riding hood と girl の2つの PF が存在することになり、更には、言語表現の明示的な意味ではない girl を PF とすることが、理論上の問題となるからである。

- (31) The girl blinked.
(32) Red Riding Hood blinked.

	red riding hood → girl	girl → eyelids
A	「特徴づけ」 PF(RE1) RE2	「意味の2層構造」 RE2 AZ
B	PF AZ / PF	AZ / PF AZ

9-2 「特徴づけメトニミー」は、PF / AZ 不一致現象ではない。

本論の主張する両タイプのメトニミーが PF / AZ 不一致現象であるとすれば、両タイプにおいて、次のように、discrepancy の生起に違いのあることが説明できない。

- (33) (a) the girl (少女 → まぶた) discrepancy 非生起
(b) The girl blinked. (少女 → まぶた) discrepancy 生起
(c) The girl came. (少女 → まぶた) discrepancy 非生起

- (34) (a) Little Red Riding Hood (着用物 → 少女) discrepancy 生起

(b) Little Red Riding Hood blinked.

(着用物 → 少女) discrepancy 生起

(c) Little Red Riding Hood came.

(着用物 → 少女) discrepancy 生起

AZ とは、述語と直接関わる対象であるが、(34) における「赤頭巾 (被り物) → 女の子」という指示対象の変化は、述語との関わり無く、別個に機能しているため PF/AZ 不一致現象とはならない。

9-3 「特徴づけメトニミー」は、PF/RE 不一致現象である。

Jackendoff (1997) 指摘の、次の言語事実の合理的な説明から、特徴づけメトニミーの指示対象の変化が支持される。(35) (36) は、ニクソンが、自分の演じられているオペラを観劇中、憤慨して立ち去る場面である。

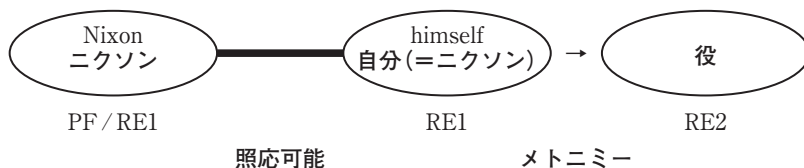
(35) Nixon was horrified to watch himself sing a foolish aria to Chou En-lai.

ニクソン (本人) は、自分 (→ 演じられる自分の役) が馬鹿げたアリアを周恩来に歌うのを見てぞっとした。

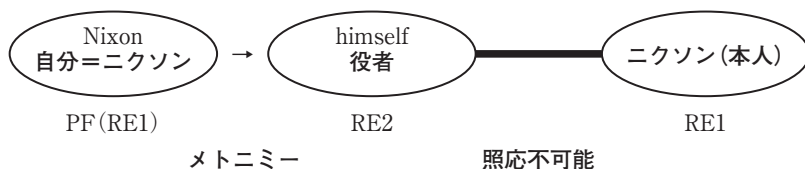
(36)* After singing his aria to Chou En-lai, Nixon was horrified to see himself get up and leave the opera house.

* 馬鹿げたアリアを周恩来に歌った後、ニクソン (→ 役者) は、自分 (本人) が立ち上がって、オペラハウスを出て行くのを見てぞっとした。

(35) の説明



(36) の説明



(36) が成立しない事実は、特徴づけメトニミーでは、ターゲットが RE であると捉えることの妥当性を支持している。つまり、特徴づけメトニミーが働き、Nixon が役者に指示対象変化するため、ニクソン本人を示す himself と照応できない。それでは (35) はなぜ照応が可能であろうか。himself が「役」に指示対象変化しているが、「役」は鏡や写真の中の像と同様、本人と同一視が可能だからである。

9-4 「意味の2層構造メトニミー」では、PFがREである。

(37) Mr. Miller and Mr. Jackson collided in their cars at the intersection and both men died on the spot. Their cars were carried to the vacant lot. Mr. Miller is parked here and Mr. Jackson is parked over there.

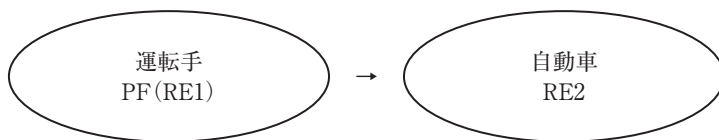
(38) Today the parking lot A is full. So, Mr. Ward is parked over there in the parking lot B.

(37) は特徴づけメトニミー、(38) は、意味の2層構造メトニミーであり、前者では、指示対象が変化し（人→自動車）、「自動車」が指示対象で、PF-RE が不一致、他方、後者では、指示対象は変化せず、「人」が PF/RE で、「自動車」が AZ で、PF-AZ が不一致。この違いは、主語が「死者」の (37) が容認でき、主語が「死者」の (39) が容認できないことから支持される。

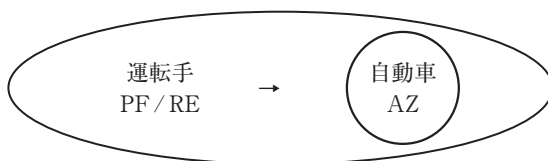
- (39) Today the parking lot A is full. * So Mr. Ward is parked over there in the parking lot B after Mr. Ward died yesterday.

両メトニミーを図示してみよう。

- (40) Mr. Miller is parked here and Mr. Jackson is parked over there.



- (41) Mr. Ward is parked over there in the parking lot B.



以上、2タイプのメトニミーの存在を支持する言語現象を4点見た。

10. PF-AZ 不一致の下位区分

同じ PF-AZ 不一致現象であるが、(42) の Tough 構文と (43) (44) には違いがある。

- (42) (=27) John is easy to please.

- (43) (=22) David blinked.

- (44) (=38) Today the parking lot A is full. So, Mr. Ward is parked over there in the parking lot B.

(43) では、PF と AZ は、「全体／部分」の関係で、(44) も「総体（主体＋

道具)／部分(道具)」と捉えられ、「全体／部分」の関係にある。しかし、(42)では、PFとAZは、「モノ／行為」の関係で、「全体／部分」の関係でなく、2層構造ではあるものの、異なっている。それは、対象を叙述する場合に、対象に内在する性質に代わり、働きかける行為の性質(難易度や快・不快)による叙述というメカニズムが機能しているからである。(42)の2層構造は、次のように示される。

表面の意味：言語表現の伝達内容は、対象 PF「ジョン」の叙述。

背後の意味：述語“be easy”が直接関係するのは、働きかけの行為 AZ「喜ばすこと」。

2タイプの PF と AZ の不一致は次のように対比できる。

	PF	AZ
(43)(44) のタイプ	「観察対象」	述語が直接関係する「対象の一部分」
(42) Tough 構文	「叙述対象」	述語が直接関係する「(働きかけの) 行為」

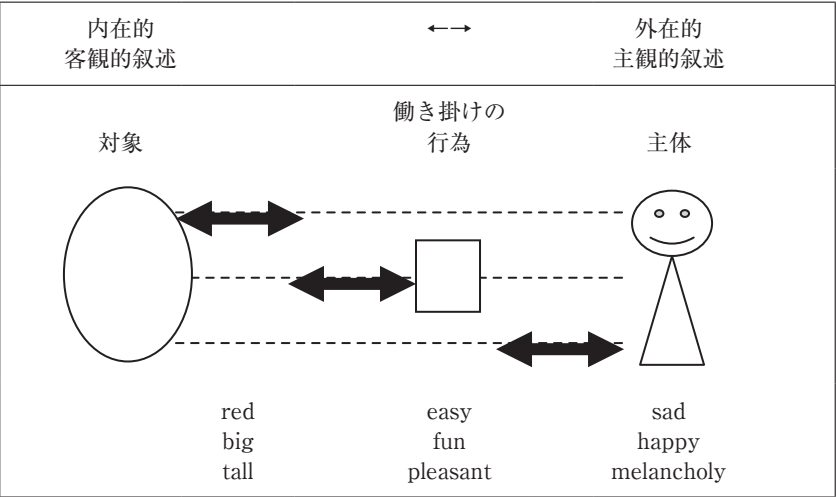
11. 客観的叙述と主観的叙述

初山(2010)は、ある特徴が、語の表す対象に内在している程度、つまり、外的な物事に関与しない程度のことを「内在性」と呼び、内在性の程度の高い特徴を内在的な特徴、他方、外的な物事に関与する程度の高い特徴を外在的な特徴としている。これを参考に、対象について叙述する時、その対象に内在する性質(例:big)として捉える場合を「客観的叙述」と呼び、その対象の性質を対象に外在した形で捉える叙述を「主観的叙述」と呼べば、対象に働きかける行為の性質によって叙述する Tough 構文は後者に該当する。更に、(45)のような「転移修飾語(transferred epithet)」の場合は、対象に

関して抱く感情や認識で対象を叙述するため、一層主観的な叙述と位置づけられる。

(45) He lay all night on his sleepless pillow. 『現代言語学辞典』(1988)

図は客観的叙述から主観的叙述までを段階的に示したものである。太い双方向の矢印は、既に述べたように、対象の特徴を捉える仕方を示している。



12. まとめ

本論では、Tough 構文とメトニミーについての学生の反応、授業での説明、これをてがかりとして、この2点を線で結んだ、Langacker (1995) による Tough 構文のメトニミーとしての分析及び問題点を見た。その後、本論の Tough 構文とメトニミーについての提案をした。本論では、メトニミーと AZ-PF 不一致の関係、そして両者の異なったタイプを整理・分類し、Langacker の分析「メトニミーの一種である Tough 構文」を、次に示す下位区分とメカニズムの中に位置づけた。(数字は代表的例文であり、(27) が

Tough 構文である。)

メトニミー	特徴づけ (PF-RE 不一致) (18)	
	意味の二層構造 (PF-AZ 不一致)	全体と部分 (19)
		対象と行為 (27) (45)

メトニミーは、PF-RE 不一致と、PF-AZ 不一致に大別される。また、PF-AZ 不一致現象は、PF と AZ の関係が、「全体と部分」と、「対象と行為」の型に大別される。「Tough 構文が、メトニミーの特別のケースである」の意味するところは、Tough 構文がメトニミーにおける、PF-RE 不一致型ではなく、PF-AZ 不一致型に分類され、更に、PF と AZ の関係が、「対象と行為」つまり、主観的叙述の型に位置づけられるという点を示した。

註

- (1) 本論の分析は、平成28年度の第17回日本認知言語学会（9月10日、於明治大学）での発表内容の一部を発展させたものである。

参考文献

- 坂本真樹（2002）「属性を表す文法構文の認知論的考察—中間構文と Tough 構文」JELS 19：186-195.
- 佐藤信夫（1992 [=1978]）『レトリック感覚』講談社.
- 篠原俊吾（1993）「形容詞と前提行為—Tough 構文とその周辺—」『実践英文学』43. 87-100.
- 篠原俊吾（1994）「換喩発生の認知プロセス」『実践英文学』45：15-29.
- 篠原俊吾（2002）「悲しさ」「さびしさ」はどこにあるのか—形容詞文の事態把握とその中核をめぐる—西村義樹編『認知言語学Ⅰ：事象構造』261-284. 東京大学出版.
- 瀬戸賢一（1997a）『意味のレトリック』巻下吉夫・瀬戸賢一『文化と発想とレトリック』研究社.
- 瀬戸賢一（1997b）『認識のレトリック』海鳴社.
- 田中春美（編）（1988）『現代言語学辞典』成美堂.

- 谷口一美 (2003) 『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』 研究社.
- 辻幸夫 (編) (2002) 『認知言語学キーワード事典』 研究社.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』 くろしお出版.
- 西村義樹 (2002) 「換喩と文法現象」西村義樹 (編) 『認知言語学 I: 事象構造』 285-311. 東京大学.
- 西村義樹・野矢茂樹 (2013) 『言語学の教室—哲学者と学ぶ認知言語学』 中央公論新社.
- 野村益寛 (2014) 『ファンダメンタル認知言語学』 ひつじ書房.
- 舩山洋介 (1998) 「換喩 (メトニミー) と提喩 (シネクドキー) —諸説の整理・検討—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』 6: 59-81. 名古屋大学留学生センター.
- 舩山洋介 (2010) 『認知言語学入門』 研究社.
- 舩山洋介・深田智 (2003) 「第3章 意味の拡張, 第4章 多義性」松本曜 (編) 『認知意味論』: 73-186. 大修館書店.
- 山梨正明 (1988) 『比喩と理解』 東京大学出版会.
- 山梨正明 (1992) 『推論と照応』 くろしお出版.
- Croft, W. (1993) "The Role of Domains in the Interpretation of Metaphors and Metonymies." *Cognitive Linguistics* 4 (4): 335-370.
- Fauconnier, G. (1994) *Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction in Natural Language*. Cambridge University Press. (坂原茂・水光政則・田窪行則・三藤博 (訳) (1996) 『メンタル・スペース』 白水社.)
- Goossens, L. (1990) "Metaphotonymy: The Interaction of Metaphor and Metonymy in Expressions for Linguistic Action", *Cognitive Linguistics* 1: 323-340.
- Group μ (Le groupe μ). (1970) *Rhetorique generale*. Librairie Larousse. (佐々木健一・樋口桂子 (訳) (1981) 『一般修辞学』 大修館書店.)
- Hall, R. A. (1973) "The Transferred Epithet in P. G. Wodehouse", *Linguistic Inquiry* 4 (4): 92-94.
- Ikegami, Y. (1982) "'Indirect Causation' and 'De-Agentivization,' The Semantics of Involvement in English and Japanese." 東京大学教養学部外国語科研究紀要 29 (3).
- Jackendoff, R. (1997) *The Architecture of the Language Faculty*. The MIT Press.
- Langacker, R. W. (1984) "active zones". *BLS* 10: 172-188.
- Langacker, R. W. (1990) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar vol. 2: Descriptive*

- Application. Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1993) "Reference-point Constructions." *Cognitive Linguistics* 4 (1): 1-38.
- Langacker, R. W. (1995) "Raising and Transparency." *Language* 71: 1-62.
- Langacker, R. W. (2000) *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press. (山梨正明 (監訳) (2011) 『認知文法論序説』 研究社.)
- Nunberg, G. (1995) "Transfers of meaning", *Journal of Semantics* 12: 109-132.
- Panther, K-U., and G. Radden (1999) "Introduction," in Panther, Klaus-Uwe and Günter Radden (ed.) *Metonymy in Language and Thought*. 1-14. John Benjamins.